

# MY OBSESSION

パリを拠点にする彫刻家が、日本の自然に見出す“美”。



## Jean-Michel Othoniel

ジャン=ミシェル・オトニエル / 現代アーティスト

1964年、フランスに生まれる。80年代後半より、彫刻作品、インスタレーション、パフォーマンスなどジャンルレスな創作活動が続ける。93年からは主にガラスを用いた彫刻作品を多く手掛ける。近年では、建築的な側面をも兼ね備えたその作品は、世界各所の庭園や史跡にパブリックアートとして展示されている。現在はパリを拠点に活躍中。



1. 日本の自然美と並んでオトニエルを魅了するSANAA設計による金沢21世紀美術館。2. グリッド状に整然と並ぶ菊祭りの菊の美しさが、創作のインスピレーションに。3. ガラスを用いた立体作品や、金箔を用いた絵画作品など新作シリーズが展示される日本初のギャラリー展『《夢路》 DREAM ROAD』は、ペロタン東京にて開催。(9月16日～10月24日)

9月からペロタン東京で個展を開くジャン=ミシェル・オトニエルはパリを拠点にするアーティスト。1992年に初めて日本を訪れて以来何度も来日し、日本文化への造詣も深い。今回の個展には菊を、弘前れんが倉庫美術館でのグループ展にはりんごをモチーフにした作品を出品している。彼のアートの源泉は？

自然のものを見るのが好きだ。作品のモチーフに活かすのはもちろん、自作を自然の中、とくに庭園に置くのが気に入っている。僕の彫刻と自然が遊ぶように見えるのが楽しいんだ。花はとくに気になる。9月の個展では菊からインスピレーションを得た作品を展示する予定だ。秋に咲く菊は1年の最後に咲く花として特別な意味がある。フランスでは、19世紀に流行したジャポニスムの影響で、菊は日本を代表するロマンティックな花というイメージが生まれた。また亡くなった人を偲んでお墓に供える花でもある。僕はこういつた花にまつわるイメージや意味にも興味がある。たとえばシャクヤクには恥じらいといった意味もあって、絵の中で若い女性がシャクヤクを持つていると、そこには特別な意味が生まれるんだ。菊の花それ自体の構造的なフ

ームも彫刻家の眼から見てとても魅力的だ。日本の菊祭りでは菊を整然としたグリッド状に並べているのに驚いた。ラディカルでミニマル、まるでドナルド・ジャッドのコンセプチュアル・アートみただったよ。個展のタイトルは『《夢路》』にしたんだ。夢路は菊の品種名なのだけど、アートは夢への道だからね。アートは世界に希望や幸福をもたらすものでありたいと考えているんだ。僕はガラスを素材にしていることが多く、今回の作品もガラスだ。透明なガラスは光を透過させるところが気に入っている。来日するとそのたびに長期滞在

している。日本ではあらゆる世代が自然に親しみ、リスベクトしていることに感銘を受けた。ヨーロッパでは年配の人にはそういった傾向があるけれど、若い世代では関心を持たない人が多い。9月に日本に行くことができたから瀬戸内海の豊島に行きたい。日本は伝統的な建築だけでなく安藤忠雄やSANAAの美術館建築も素晴らしい。豊島では自然と建築とアートが一体になった場を体験してみたい。島でスローダウンするのはもちろん、東京から豊島までの道行きにも意味がある。時間をかけて瞑想に入っていくようなものだからね。

“アートは世界に希望や幸福をもたらすものでありたいと考えているんだ。”